

## 意欲的に思いを伝え合うことができる生徒の育成 ～学んだことを定着させるためのコミュニケーション活動を通して～

### 1 主題設定の理由

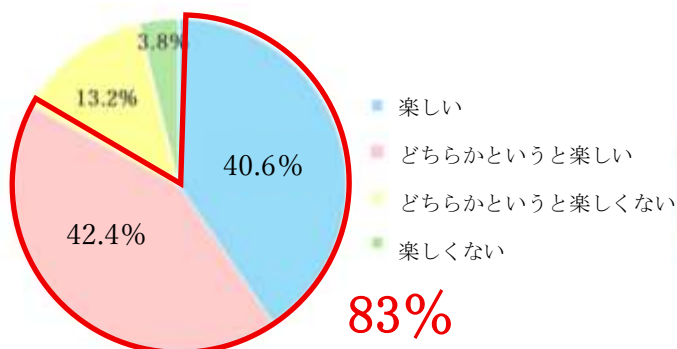
現代のグローバル社会において、英語を使用する場面は、いつ誰にでも起こり得る。それゆえ、正確さにとらわれすぎることなく、自分がこれまでに獲得した知識や技能を駆使し、「伝えよう」「理解しよう」とすることができる生徒を育成したい。また、現代の社会ではSNSなどの発達により、さまざまな人と顔を合わせずに簡単にコミュニケーションをとることができる。自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いたりすることに抵抗を感じず、多様な社会において、年齢、出身、人種、興味・関心事など自分とは文化的背景が異なる相手とのかかわりを通して、豊かな人生を送ることができる生徒を育成したいと考えた。

そこで、本校の生徒の実態を把握するために、2年時の4月に英語でのコミュニケーションに関するアンケートを実施した【資料1】。「英語でコミュニケーションをとることは楽しいですか」という質問に対して、83%の生徒が「楽しい」「どちらかという楽しい」と肯定的な回答をした。その一方で「英語でコミュニケーションをとることは難しいですか」という質問に対して、それ以上の約87%の生徒が「難しい」もしくは「どちらかという難しい」と回答した。理由については、「単語がわからない」「文法がわからない」という回答が多くみられた。しかし、「英語で話すことが恥ずかしい」や「間違えるのが嫌」と回答した生徒はごく少ないことからコミュニケーションに対して前向きな生徒が多いことがわかった。

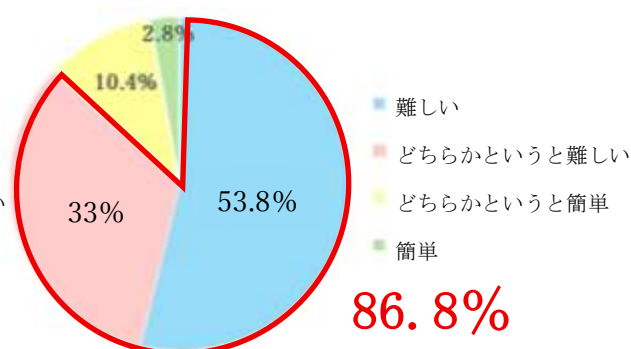
こうした姿から、「語彙や文法などの基礎の定着」や「学習した語彙や文法を自己表現や他者理解などにおいて活用する力の育成」が必要だと考えた。そこで、学習した語彙や文法を、問題演習ではなくコミュニケーションの場で繰り返し復習することで、より意欲的に思いを伝え合うことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

### 【資料1】 事前アンケートの結果

Q. 英語でコミュニケーションをとることは楽しいですか



Q. 英語でコミュニケーションをとることは難しいですか



## 2 研究の仮説

- (1) コミュニケーション活動を頻繁に行えば、コミュニケーションに対する抵抗感を減らすことができ、間違いを恐れずにコミュニケーションをとることができるだろう。
- (2) 既習語彙や既習文法を繰り返し復習することで定着させれば、自信をもってコミュニケーションをとことができ、自分の考えをより豊かに表現したり、相手の考えをより正確に理解したりすることができるだろう。

## 3 研究の手だて

### (1) コミュニケーション活動の充実「S & S (Small Talk & Short Speech)」

#### ① ストーリー設定

生徒の興味・関心に即した身近な話題や、実際に起こり得る状況を背景とするストーリーを設定して会話させることで、生徒の「伝えよう」「理解しよう」とする姿勢を育てる。

#### ② スモールステップ

ア 会話を継続させるためのスキルを段階別に提示し、スモールステップのしくみを工夫する。

イ トピックについての考えを深め、会話から発表へと活動を展開させることで、他者とのコミュニケーションを通して自分の考えを深めさせたり、さまざまな表現に触れさせたりして表現力を高める。

### (2) 既習語彙、既習文法の習得法の工夫「Review Talk」

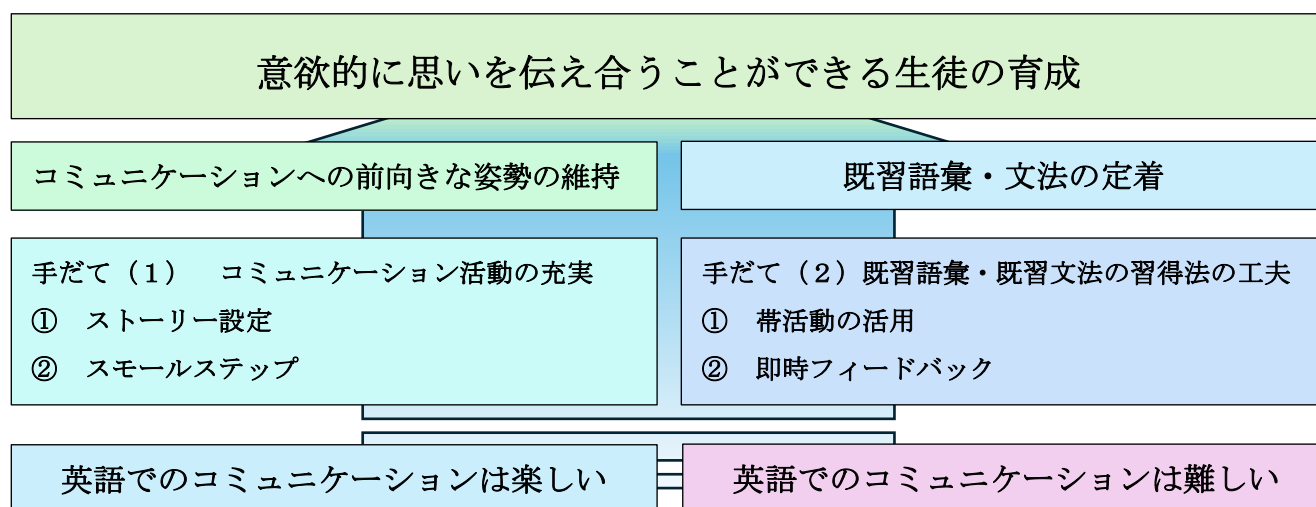
#### ① 帯活動の活用

コミュニケーション活動の中で使用された語彙や文法を復習することで、実際の場面をイメージさせながら語彙や文法の定着をはかる。

#### ② 即時フィードバック

生徒のつまづきを即時に把握し、復習のターゲットとなる言語材料をその都度設定できるよう、フィードバックを工夫する。

## 4 研究構想図



## 5 研究の実際

### (1) 手だて① コミュニケーション活動の充実「S&S」

生徒の興味・関心に即した身近な話題や、実際に起こり得る状況を背景とするストーリーを設定して会話させることで、「伝えよう」「理解しよう」とする気持ちを自然に引き出せるよう工夫した。ストーリーは、教科書に登場するキャラクターが実際に自分の学校に留学生としてやって来るという設定で、留学生に日本を紹介するコミュニケーション活動を行った。会話を行う前に、トピックに関する知識や考えをグループで共有させた。その後、留学生と会話するという設定でペアを変えながら3回やり取りを行い、最後にスピーチ形式の発表を行った【写真1】【資料2】。



【写真1】スピーチ発表の様子

### 【資料2】S&Sの流れ



また、会話をする際には「会話を継続させるためのスキル」を提示し、自分が使えるようなスキルを活用するように促した【資料3】。当初は1分間英語で話し続けることが困難であった生徒も、事前にグループでトピックに関する知識や考えを共有し、スモールステップで話す内容を整理することで、語彙が増え、表現が豊かになった。さらに、「会話を継続させるためのスキル」を活用することで2分間会話を続けられるようになった。

### 【資料3】会話を継続させるためのスキル

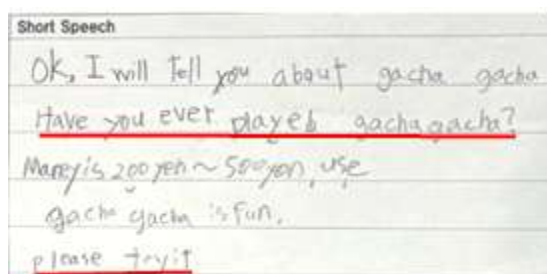
| 発信側                  | 受信側        |
|----------------------|------------|
| 質問返し                 | 追加で質問する    |
| 2文以上で伝える             | 感想や意見を述べる  |
| 2文で伝える               | 同意・賛成・反対する |
| 文で伝える                | リアクションをとる  |
| 知っている単語を並べて伝える       | リピートする     |
| Yes or No や 単語のみで伝える | あいづちを打つ    |

スピーチ原稿の作成時には、伝えたいことが相手に伝わるように、「5文以上は書くこと」「構成を組むこと」「聞き手に配慮すること」の3つを意識させた。2年時の7月に実践した「おすすめの日本食」をトピックにしたときには、「給食中に留学生からおすすめの食べ物を尋ねられた」というストーリーで活動を行った。単に、「日本食についてのスピーチを行う」という設定ではなく、現実味のある目的・場面・状況を明確に提示した。これにより、生徒が課題発表のためではなく、実際のコミュニケーションをイメージしてスピーチを行う様子がみられた。例えば、そもそも相手がその食べ物を知っているかどうかを確認してから紹介に入る構成を組み、「Do you know ～?」から会話を切り出したり、スピー

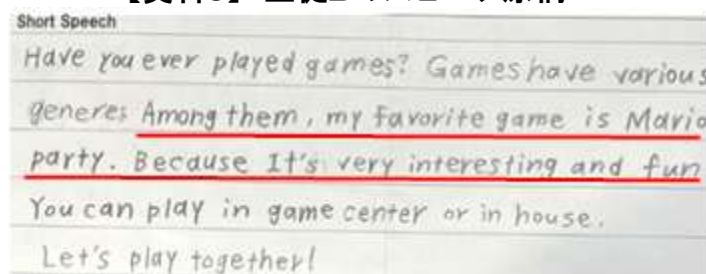
チの最後に「Please go and try it!」、「Please make and eat it.」、「You should try it once.」など相手に実食を促したりする表現があった。さらに、その食べ物が食べられるおすすめのお店を紹介し、「Let's go there together.」や「If you eat sushi, please tell me your favorite sushi topping.」と添えるなど、聞き手への配慮や今後の予定を計画するような発展的な表現を用いる生徒の姿がみられるようになった。

また、3年時の5月に実践した「日本のポップカルチャー」をトピックにしたときにも、生徒が構成や聞き手への配慮を意識している様子がみられた。スピーチ原稿を見ると、単語のスペルや文法に誤りは見られるものの、英語が苦手な生徒も、「Have you ever played *gachagacha*?」や「Please try it.」のように、聞き手に配慮し、構成された英文を書くことができるようになったことがわかる【資料4】。また、英語が得意な生徒においては、「Among them, my favorite game is Mario Party because it's very interesting and fun.」のように、聞き手に配慮するだけでなく根拠を添えて説得する表現を取り入れる姿もみられた【資料5】。

#### 【資料4】 生徒Aのスピーチ原稿



#### 【資料5】 生徒Bのスピーチ原稿



回数を重ねるごとに、当初は原稿作成に15分以上かかっていたところ、10分で書ける生徒が増えた。慣れもあると思うが、原稿作成前にトピックについて十分に会話を行ったことで、生徒は相手の考えを取り入れたり、相手が用いた語彙や表現を自分の表現に生かしたりできるようになった。このことが、短時間で原稿を作成できるようになった一因であると考えられる。日本語でも英語でも、自分の中に知識や考えのないことについては話すことは難しい。物事や相手に興味・関心をもち、コミュニケーションを継続させることができるよう、活動の最初にトピックに関する知識や考えを共有させる流れは、スピーチ原稿の作成においても有効であったといえる。

## (2) 手だて② 既習語彙、既習文法の習得法の工夫「Review Talk」

授業の最初5分程度を用いて、帯活動「Review Talk」を行った。教科書の学習内容や学校行事、年中行事、時事問題など、そのときの身近な話題やテーマで会話させた。決まった質問を提示するのではなく、テーマや状況のみを提示して会話させる中で、既習語彙や既習文法を活用できているかを確認した。その際、復習のターゲットとなる言語材料をあらかじめいくつか想定しておき、生徒の発言から拾い上げることで、コミュニケーションの実際の場面をイメージさせる工夫をした。

3年時の7月に実践した「Unit3 How can we save animals?」の単位では、表現活動に積極的な生徒でもよく間違える「疑問詞を含む語句を用いた疑問文」を復習ターゲットに設定し、「動物」をテーマに会話させた。1回目のやり取りが終了したところで、生徒Aの「What do you like animal?」という発言を取り上げた。「質問することによって会話を継続させていこうとしていたね」と価値づけをした上で、「何の動物が好きか」と質問したかったことを全体で確認し、「何の〇〇が～か」という疑問文の形を復習した。まず、

「For example, when you want to know someone's favorite food, you can ask “What food do you like?”」と板書とともに確認することで、「what + 名詞 + 疑問文」の形を再認識させた。その後、「So, when you want to know 相手が勉強する教科, how can you ask?」、「When you want to know 相手がしているスポーツ, how can you ask?」を押さえた上で、「When you want to know 相手の好きな動物, how can you ask?」と聞くことで、生徒たちは「What animal do you like?」と正しい語順で言えるようになった。役割を交代させ、繰り返して会話させた後、ペアを変えた生徒Aの会話を確認したところ、自然に「What animals do you like?」と話すことができていた。

また、このやり取りの中で生徒Aが最後に「what... what dog ... 」と文にできず困っていたため、即時フィードバックを行った。「どんな種類の犬を飼いたいかを聞きたかった」という生徒Aのために、全体で「What kind of ○○ ～?」の表現を復習した。ここでも、生徒の実際のコミュニケーションの中で使いたい表現について、フィードバックしながら復習することで、どのような場面で使用できるかを改めて確認することができた。また、Review Talk 後の振り返りでは、「単語だけでも会話を続けようとしていた」「リアクションがとれていた」「質問をして会話を続けようとしていた」「相手の発言を繰り返していた」といった意見が多くあり、手だて①のS & Sで確認した「会話を継続させるためのスキル」を意識している様子が見えた。

## 6 成果と課題

### (1) 手だて①の成果

S & Sの活動時に限らず、英語でコミュニケーション活動を行う際には、英語が苦手な生徒も「会話を継続させるためのスキル」を活用することで、相手の発言に対して何かしら返すことができ、会話を継続させることができるようになった。また、思いが伝わらなかったときには簡単な英単語で言い換えたり、相手が表現に困っているときに相手の思いを推測して確認したりする生徒の姿も見られた。

活動後の振り返りからも、多くの生徒が「会話を継続させるためのスキル」を意識している様子が見えた。英語が苦手な生徒Cは、コミュニケーションを円滑に行うためのコツをつかんでいる様子が見えた【資料6】。さらに英語が好きだが得意ではない生徒Dは、自身のコミュニケーションの中に汎用性のある表現をインプットしようとする姿勢があることがわかった【資料7】。どの生徒も、得意不得意に差はあれど、伝え合うためにはどうしたらよいかを考え、意欲的にコミュニケーションをとろうとする姿が見られた。

#### 【資料6】 生徒Cの振り返り

##### Comment

リアクションをしたり、あいづちを打ったり、プリントをずっと見て話すのではなく、ときどき相手を見ながらアイコンタクトをしている人の発表は伝わりやすかった。

相手の発言が聞き取れなかったときには、「もう一回言って」と英語で言えるようになりたい。

#### 【資料7】 生徒Dの振り返り

##### Comment

目を見て発表したり、聞こえるような声で話したりすることを意識した。recommendedという「おすすめの」という意味の英語を使っている人がいたから、自分も使えばよかったと思った。

もっと言いたいことを言えるようになるために、本場の人がよく使うような文法や単語を知っていきたい。

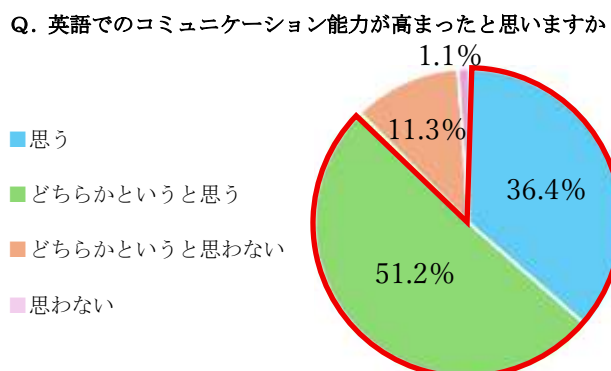
## (2) 手だて②の成果と課題

帯活動としてペアでの会話を頻繁に取り入れることで、意欲的に思いを伝え合うことができる生徒が増えた。また、あらかじめ想定しておいた復習のターゲットとなる語彙や文法の間違いを生徒の会話から取り上げ、即時フィードバックをすることで、多くの生徒のつまづくポイントを復習することができた。しかし、間違いを訂正することで生徒の「伝えよう」「理解しよう」とする自信をなくすことにもつながりかねないと感じた。今後は、特定の生徒を指名するのではなく、全員の会話の中から気になった表現を取り上げる形で復習を行っていきたい。課題は残ったものの、実際の会話を用いて復習することで、生徒は使用場面をイメージしやすくなり、**Review Talk** で取り上げた表現をS & Sでのやり取りや発表でうまく活用することができるようになり、相乗効果が得られた。

## (3) 研究全体を通しての成果と課題

3年時1学期末に研究当初と同じアンケートを実施したところ、「英語でコミュニケーションをとることは楽しいですか」という質問に対して肯定的な回答をした生徒が83%から89.5%に増えた。さらに、「どういうときに、英語でコミュニケーションをとることは簡単になった(or 上達した)と思いますか」という質問に対しては「単語や文法を理解し、使えていると感じたとき」、「S & Sで英語をたくさん使っているとき」「会話が続きたり盛り上がりたりしたとき」といった回答が多くあり、本研究の成果を感じた。一方で「難しくなった」と回答した生徒からは「新しい文法や単語が覚えきれていない」「新しく学習した文法と既習文法が混同してしまう」という回答があった。学んだことを定着させるためには、学習後できるだけ時間をあけることなく、コミュニケーションの中で繰り返し使用していくことが必要不可欠だと考える。

【資料8】 事後アンケートの結果



3年時の学年末に行ったアンケートでは、「英語でのコミュニケーション能力が高まったと思いますか」という質問に対して87.6%の生徒が「思う」「どちらかと思う」と回答した【資料8】。約9割の生徒が肯定的な回答をしたことから、本研究を通して、意欲的に思いを伝え合うことのできる生徒の育成に一定の成果があったと考える。また、「S & Sや**Review Talk**など、英語の授業でのコミュニケーション活動を通して、「伝えよう」「理解しよう」という思いが高まったと思いますか」という質問に対しては、85.3%の生徒が肯定的な回答をした。「英語の授業でたくさんコミュニケーション活動をしたから、他の教科の授業での話し合いでも、相手の意見を理解しようとしたり、自分の考えを理解してもらおうとしたりと、積極的にコミュニケーションをとれるようになった」という感想もあり、コミュニケーション能力そのものの向上につながったと考える。

今後も、生徒が自分の考えを積極的に伝え、相手の考えを受け止めることに抵抗を感じることなく、多様な文化的背景をもつ人々とのコミュニケーションにおいて、「伝えよう」「理解しよう」とする姿勢を大切にしながら、豊かな人間関係を築いていけるよう指導していきたい。